

原田申裴

佐竹申伍



青樹社刊

著者無検印承認

異説伊達騒動 原田甲斐

定価 350 円

昭和45年3月25日発行

著者 佐竹申伍

発行人 土井 勇

東京都千代田区三崎町2-6-7 青 樹 社

電話(03)261-9766番・263-7267番 振替東京47648番
落丁・乱丁本はお取り替え致します

0093-113601-3828

異説伊達騒動

原田
甲斐

目次

運命の炎	五
嵐の前ぶれ	三
ある決意	五
あやつり人形	三
渦のなかに	一〇
その一夜	二五
暗雲うごく	二五

矢面に立つ

一七

丹三郎の死

一八

伊東事件始末

二三

安芸ついに立つ

二四

苦悩の対決

二六

乱刃

二五

装幀 村上 豊

運命の炎

一

なんの前ぶれもなく、いきなり襲いかかった一陣の突風。これがお容の運命を大きく変えるきつかけとなった。

その日の昼さがり。南西の一角から押しよせてきた厚い黒雲は、たちまち江戸の空に覆いかぶさり、市中をたそがれどきの昏さへと引き入れた。同時に、さながら魔群の通過を思わせる不気味な陰り声とともに、家々の棟をゆるがし、樹々の枝葉を舞いあげて、激しい風が吹きつけてきた。

火事が起きたのは、この最中である。

はじめ、火の手は神田の岩本町にあがったと思う間に、烈風にあおられ、炎は柳原から神田川を飛びこえ、佐久間町河岸、花房町へと燃えひろがる。そして、大地を舐めるように旅籠町から同朋町と、俗にいう明神下の一帯を焼き払い、台地を這いのぼって湯島の一角まで迫ったところで、ようやく風もおさまり、鎮火をした。

それは、わずか一刻（二時間）あまりの悪夢のような出来事であった。

「ああ——どうしたらいいのかしら」

お容は、なかば放心のおもちで、まだくすぶりつづける焼け跡を眺めていた。

猛火に追われ、それこそ身一つで、このお茶の水の台地まで逃げのびてきたものの、恐怖のおののきは一向におさまらず、すっかり途方に暮れた思いだった。

引き返してたしかめるまでもなく、同朋町の家はきれいに灰となっている。

あいにく伯父の添田瑞仙が、お城勤めの番に当って、留守中なのが不運だった。ふだんから同朋衆（お城坊主）仲間でも、とくに吝嗇家で名高い伯父のことだ。お容がなに一つ、家財も持ち出さずに逃げたことに對しては、伯父は相当きつい態度で責めてくるだろうと思えば、彼女はいよいよ氣が重い。

しばらくは、焼け跡へ戻ろうという氣にもなれなかった。

「驚いたこったねエ。からっ風の吹く真冬ならいざ知らず、六月も末のいま時分、こんな大火事になろうとはね」

「ついでのことに、おれンとこの長屋も燃えちまえばいいのに。そうなりや、二年越しの家賃が棒っ引きにできたんだ」

物見高いは江戸っ子のくせ。火事見物にくり出した弥次馬連中だろう、職人ふうの男たちが、のんきなことを言いながら通りすぎていった。

お容は、空虚な思いで、それを聞いている。もう、黒雲もいつか流れ去り、嘘のように陽ざしが影を長く這わせていた。

この時、吉祥寺橋（現在の水道橋）のほうから、ひずめの音も高らかに、二騎の武家が坂道を駆けのぼってきた。

ふと、お容は、道ばたの草むらへ身を避けた。

「や——お容さんじゃありませんか」

一、二間、行き過ぎたところで、うしろの馬にまたがっていたお小姓ふうの人影が、大きく声をかけてきた。

びっくりしたように振り向いた。そのほの白いおもて。

「——あ、丹三郎さん」

われ知らず、お容も駆け寄っていた。

彼女には、叔母の子にあたる、二つ歳下の従弟、塩沢丹三郎であった。

いまは亡き叔父につながる縁で、桜田御門外の仙台藩伊達家の陪臣（臣下の臣）となっている従弟である。

丹三郎は、馬から飛び降りながら、

「お容さん——では、伯父上の家も」

「ええ」

「そ、そりゃあ」

と、大きく首をふる。

「折りあしく、伯父が御城勤めの日で、わたくし一人でしたので、なに一つ、持ち出すこともできませんでしたの」

いかにもそれが氣にかかるといった様子のお容をうち眺めて、丹三郎は深くうなずいた。彼も、添田瑞仙の氣質はよくわきまえていたからである。

まして、お容は早く両親を失い、伯父の世話になっている身。いっそう、彼女のつらい立場も、察しがつこうというものだ。

そこへ、静かに歩み寄ってきたのは、先頭の馬に乗っていた丹三郎の連れ。歳は四十ばかりの、立派な武家である。

「丹三郎」

その女子おなこは、と、お容を見やって、目顔で問いかける。

「はっ——手前の従姉にあたる者でございます」

丹三郎は、女性のように白い頬を、ほんのり赤めるや、堅くなって引き合せた。

「お容さん、こちらのお方が、手前のご主人、原田甲斐さま」

「――あ」

小さく声を放って、お容はあわてて髪に手をあてがいながら、挨拶した。

「初めてお目にかかります。容と申します。お見苦しい姿をお目にかけてまして……」

たしかに、火事場から必死に逃れてきたばかりのお容だ。髪形も、身なりも、すっかり乱れていた。若い女性の身として、やはり、身だしなみのことが、まず気にかかる。

「そうか。丹三郎とは、いとこ同士か。道理でおもごしに似通うところがあると思ったわけだ」

甲斐はそう言って、しげしげとお容を見つめながら、

「いま、ちらりと小耳にはさんだ話では、そなたの家も類焼いたしたとか」

「は、はい」

「それは気の毒な。さぞ困っていることであろう」

深く同情を示すと、かたわらの丹三郎を振りむいて、口早やに命じた。

「おぬし、わたしの供はもうよいぞ。ここからその女子を連れて、先に屋敷へ立ち帰るがよい」

「しかし、まだ御検分も済みませぬのに、手前が先に戻りましては申訳が……」

「よいと申すのだ。これから先は、わたし一人で充分だ。それよりも、その女子、だいぶ疲れておる様子。早く屋敷で休養をとらせてつかわせ」

「――はっ」

主人の暖かい言葉に、丹三郎、かしこまって一礼した。

「お心づかい、ありがとうございます」

お容も小声に礼をのべながら、そっと、あらためて原田甲斐の顔を見直していた。

はじめ、ひと目みたときの印象では、どこか無愛想で、ちょっと怖いような人物だったので、ほとんど伏眼勝ちに、まともには顔もあげ得なかったお容なのだ。

確かに、甲斐のおもてには、彼女が見なれている江戸育ちの者とは違った、線の太さがみなぎっていた。

濃く太い眉。角張った顎。

いかにも意志の強い、頑固で一徹そうなお国者といった感じがする。

(でも、この方には、見かけによらずおやさしいお気持がおりなのだ)

お容は、ふと、そう思った。丹三郎や、自分に対する心づかいが、それほど嬉しかったのも、事実である。

「では、早く参るがよいぞ」

言い残すや、原田甲斐は、ふたたび馬上の人となって、走り去っていった。もう、振りむきもせず

二

——この年。

つまり万治三年の二月一日に、奥州仙台の城主、伊達（松平）陸奥守綱宗は、幕府より老中松平伊豆守信綱を筆頭とする連署の文書をもって、

——神田川舟入り堀の拡張工事。

のお手伝いを命ぜられた。

こうした命令があろうとは、伊達家でも、かねて覚悟はしていたことだった。

と、いうのは、伊達家では一代の英傑独眼竜政宗のあとを継いだ二代目の藩主、伊達少将忠宗が、万治元年に歿して、綱宗が三代目の当主となり、去年（万治二年）はじめてお国入りをすませてきたばかりのところだったからである。

当時の幕府には、政策上の一つの慣例があつて、外様の大大名で代替りがあると、そのあと必らず、城普請とか道普請の、何かの形で工事お手伝いが命ぜられたものだ。

しかし。

いかに覚悟のこととはいえ、この堀普請は、伊達家にとっては大変な負担であつた。

なにしろ、神田川の和泉橋から川をさかのぼって、筋違橋（現在の万世橋）、お茶の水、吉祥寺橋

（現在の水道橋）、水戸家前の小石川橋を経て、牛込見附の土橋（現在の飯田橋）までの川筋、長さおよそ三キロにわたり、物資の運搬船がはいれるように川幅をひろげ、川底をさらって、その堀りあげた土で、兩岸に土手を築くという、大工事なのである。

幕府からは、高一万石につき人夫百人という割りで、六十二万石だから六千二百人分の扶持米が支給されただけで、あとはすべて伊達家が負担をしなければならない。

工事は、五月の末に鍛初めをおこなって、ようやく着手されたばかりである。

そこへ、この計らざる大火事だ。

しかも、工事現場をはさんでの火災とあっては、直接、普請奉行の役職ではないにせよ、重臣の人として原田甲斐も、じっとしてはいられなかった。

報らせを受けるや、すぐさま、小姓の塩沢丹三郎ただ一人を召しつれ、桜田の屋敷から馬を飛ばし、工事場を見廻っていたその途中で、お容と出逢ったのである。

ふたりと別れたあと、甲斐はお茶の水の台地を川沿いに筋違橋へと駆けくだった。

目の下に、きのうまでとは打って変わった無惨な焼け跡がひろがり、ところどころ、まだ余燼もくすぶりつづけていた。

（これでまた、工事の資材も値上りするであろうし、人夫たちの賃銀もハネあがることだろう。困ったことだ）

ふと、真つ先にあたまに浮かんだのは、そのことである。

伊達家仙台藩も、はた目からみたほど、決して財政は裕福ではない。

すでに藩祖政宗が健在だった慶長から寛永年間へかけての三十年ばかりのあいだにも、江戸城の本丸や石垣工事、高田城の修築など、前後七回もの手伝い普請を割り当てられ、二代藩主忠宗のころには、京都の蔵元、大文字屋に十萬兩にも及ぶ借財ができていりさまたったのだ。

（この堀普請で、財政はまた一段と苦しくなるだろう。藩士たちにもこの上、窮乏を強いることになるう）

けれど、それは家中の者も、はや覚悟の上のことなのだ。

その点では、まず懸念はない。

ただ、甲斐の思ひわずらう問題は、ほかのところにある。

（窮乏は、当然のこと、家中の人々のところを、荒ませ、ゆとりのないものとさせよう。その時期に、あえて事を起すのは、まかり間違えば、伊達家六十二萬石を元も子もなく失ってしまう危険性があるのではないか）

そこに、迷いがある。ためらいがある。

（とはいえ、いまが絶好の機会なのだ。いまを逃したら、もう当分、その時期はやって来ないかもしれない）

甲斐は、台地をくだる急な坂道の中で馬を停めると、遠い空の一角に視線をあてたまま、ほっと深い吐息をもらした。

それから間もなく。甲斐が、筋違橋から和泉橋の工事現場に行ってみると、神田川のほとりに造った作事小屋が三棟、跡形もなく焼け落ちていた。

「あ——これは、原田さま」

そのあたりに詰めていた藩の作事方の面々が、甲斐の姿をみかけると、いずれも丁重に挨拶をしてくる。

「お役目、ご苦労——今後の工事に支障なきよう、よろしく手配を頼むぞ」

「はっ、心得ました」

甲斐は、ひとりひとりに声をかけながら、通りすぎた。

家中のあいだで、原田甲斐の評判がよいのも、こうした点にあったと言えよう。

ゆっくりと工事場を見てまわった甲斐は、一番はずれの和泉橋をすぎても、何を思ったのか、そのまま馬をすすめてゆく。これでは、桜田の屋敷とは逆方向である。

やがて浅草見附（現在の浅草橋）へ出ると、こんどは左へ馬首をめぐらし、蔵前から駒形へと道をとった。このあたりへかかると、馬もかなりの早足となっている。

ちょうど、駒形堂のほとりまでさしかかったとき、前方から勢いよく走ってきた一挺の駕籠とすれ